

フェミニズム作家エレン・グラスゴーと女性参政権運動

今井加寿

I

Ellen Glasgow (1873-1945) は南北戦争後のヴァージニアの社会史を、小説の形式で残そうとした作家である。特に初期の6作品をヴァージニア歴史小説群と位置付け、1850年から1912年の時期を扱っていることを彼女は自らエッセイ集 *A Certain Measure* の中で述べている。¹ ヴァージニア州を“Commonwealth”即ち「共和国」という古い呼び方で愛情を持って呼んでいた Glasgow は、当時のリッチモンドの人々の様子を記録として残した。家庭の中では天使であることを望まれた社会の中で、その因習に閉じ込められ身動きのできない女性たちに暖かい視線を注ぎながら、時代の風を受けて柔軟に変貌する様々な女性たちの姿を軽やかな筆致で描き続けた。

Glasgow が作家として活躍し始めた時代は、1848年セネカ・フォールズで始まったアメリカ女性参政権運動が活発になりはじめ、1920年憲法修正第19条で正式に女性参政権が認められた時期と重なる。南部の伝統的な町、ヴァージニア州リッチモンドで育った彼女は、幼い頃から女性たちの従属的で不平等な境遇に疑問を感じていた。彼女が自分自身を、「女性の社会的地位の向上と男女平等の権利を主張する」フェミニストと認めることは自然の成り行きであった。死後出版された自叙伝 *The Woman Within* の中で Glasgow は「私は常にフェミニストであった。なぜなら私は暴力を嫌うことと同じぐらい知的な変革を好んでいたのだから」(163) と明確にフェミニストであることを述べている。即ち暴力や戦争による変革に反対し続けてきた女性運動活動家の立場を肯定し、変革は望むがそれは暴力や戦争による変革ではなく、知性による変革を希望する女性の信念をはっきりと表明するものである。リッチモンドに住む様々な女性たちを作品の中に描出することによって、小説と言う形式で記録すると同時に、それを読む女性たちに知的な刺激を与え、彼女たちを因習的な抑圧から解放しようとした姿勢はまさにフェミニスト的であった。

それでは、自らをフェミニストとして認め、当時の社会史を残そうとした Glasgow は女性参政権運動とどのように関わっていたのであろうか？本稿ではまず Glasgow デビュー作を検討し、フェミニズム作家としての彼女の立場を考察する。次に、1910年前後にリッチモンドでの女性参政権運動にどのように関わっていたかを考察し、またその当時の作品、特に1909年出版の *The Romance of a Plain Man* の中で、女性参政権運動がどのように描かれているかに言及し、Glasgow のフェミニズム作家としての側面を明確化することを試みる。

II

Glasgow のフェミニズム作家としての立場は1895年 Glasgow 22歳の時、初めて出版された短編、“A Woman of Tomorrow” (Raper 1-14) に明確に表現されている。これは作家として世に出ることとなった記念すべき作品でもある。作品は厳選された語句で、長編の詩を思わせるようなリズムを持って、主人公の内なる葛藤を見事に描出している。

主人公 Patricia York はヴァージニアの田舎の農地から、その農園の「柵」を越え大学に進学

し、初めての投票もし、数々の賞を受賞し、弁護士資格を得て故郷に戻る。Patriciaは「20世紀の女性」として当時殆どの州では実際にはまだ認められていなかった投票権を持ち、自信と能力に満ち、女性が「公」の場で働くことに野心を燃やす。久しぶりに戻った故郷でPatriciaが見たものは姉Hannah Fairfaxの30歳そこそこにして既に白い髪と彼女の家の欠けた茶碗だった。昔ながらの農地を守ろうとしている故郷には欠けた茶碗に象徴される貧乏の現実があった。Glasgowは、落ちぶれた生活をしながら、それでも色白で弱々しく、髪をカールし、きれいな手を保とうとしている姉Hannahに過去の価値観を引きずった女性を描出している。使用人が少ししかないにもかかわらず、「今日は使用人が病気だから」(6) とうそをついて井戸の水をバケツに入れて運んでくるHannahを見て、Patriciaは姉がうその世界に逃げていると思う。自分は新しい女性として「正直な労働が贅沢にまさり、強い手が白い手にまさる時代」(6) に生きることを誓う。さらに恋人に出会う。彼も消耗したプランテーション農園で若い時を浪費しているとPatriciaは考える。もっと大きな世界へ出ようとする野心が彼にはないのかと問う。彼は「母がここで僕を必要としている。僕は一人息子だ。それ(この土地を守る)が義務なんだ。単純で現実的な義務なんだ。それ以外にどんな道があるというのか？」(8) 彼はPatriciaに自分のそばに残ってくれと頼む。女性として愛のために生きてほしいとPatriciaに頼む。Patriciaは女性として愛のために家庭に入るか、男性と同じように野心のために生きるのかに悩む。「20世紀の女性」は野心を選ぶ。そしてPatriciaは故郷を離れる。

10年後Patriciaは数々の事件を手がけ、弁護士として成功している。そして合衆国陪席裁判官(Associate Justice of the Supreme Court)の候補者に自分が選ばれたことを知る。この10年間で彼女は自分が求めていた地位にまで上り詰めたのである。その時ふと外を見ると、一人の女性が赤ん坊を胸に抱き、いつくしんでいる。その光景を見て、赤ん坊の柔らかな感触に触れてみたい女性としての衝動に駆られる。この10年間に私は何かを失ったのではないか?突然、自分の進んだ道を確認めたくなり、故郷ヴァージニアの農園へ戻る。

久しぶりに訪れる故郷に変化はない。昔の恋人の家を訪れる。そこには日焼けし、疲れて目の輝きのなくなった彼がやはり労働でくたびれた小柄な妻と畑を耕しながら、10年前と何も変わらない貧しい生活を続けている。Glasgowは南北戦争後も疲弊した土地から離れることなく、昔ながらの貧しい生活を営む農民の姿を冷やかな目で描出している。そして女性として結婚して家庭に入るよりも、弁護士の仕事を続けたPatriciaに自分の選択が正しかったことを確信させ、新しい女性のひとつの類型を与えている。

Glasgowはこのデビュー作において、家庭という「私的」な場所にとどまらず、社会という「公」の場で活躍する有能で野心家の女性を描いている。「20世紀の女性」として実際には殆どの州で実現していなかった参政権を持ち、自分の生き方を自由に選択でき、最高裁判所で陪席裁判官として男性と平等に活躍できる女性を描出したのである。実際にアメリカ合衆国が最初の女性陪席裁判官を選出したのは、Glasgowの作品から90年近くも後の1981年、Sandra Day O' Connor女史の出現によってである(11)。しかし1895年、既にGlasgowは女性の活躍をここまで期待していた。この短編によってGlasgowはフェミニズム作家としてのデビューを果たしたと言える。

III

Glasgow作品の中の女性たちを分類した研究で有名なBarbro Ekmanの*The End of Legend*:

*Ellen Glasgow's History of Southern Women*では1897年から1913年の間の作品がGlasgowの最もフェミニスト的な作品であると指摘されている。特にEkmanは1909年出版の*The Romance of a Plain Man*がその頂点にあると位置づけている(31)。

実はこの1909年、Glasgowは最愛の姉、Caryとともにイギリスを訪れ、イギリスでの女性参政権運動の影響を受けて帰国する。同じ年の8月、9月を避暑のためコロラド州コロラド・スプリングスで過ごす。コロラドはアメリカ合衆国でいち早く1893年女性参政権を批准した州であり、そのことを強く意識せざるを得ない環境で夏を過ごしたことになる。1909年11月28日、Glasgowは雑誌 *Jewish Record* の Carter W. Wormeley のインタビューを受け、イギリスで経験してきた女性参政権運動のことを次のように語っている。

While in England I was impressed with the fact that the most ardent and enthusiastic advocates of woman's suffrage were to be found among the most exclusive, retiring, brilliant and intellectual literary circles and among the most representative classes of society, I may mention Miss Beatrice Harraden, authoress of 'Ships That Pass in the Night,' or Miss May Sinclair, who wrote that impressive and powerful song, 'The Divine Fire,' in illustration of this point. (Raper 15)

イギリス滞在中にイギリス人女性作家たちが積極的に女性参政権運動に参加し、これをテーマにした作品を発表していることに感銘を受けたことを述べている。またイギリスのLady Constance Lyttonが、女性参政権運動に参加した平民の婦人が逮捕され投獄されたのに対し、自分が「レディ」の称号を持つために扱いが違ったことに異議を唱え、自発的に捕まり投獄された事実に感銘を受けたことを語っている(15)。イギリスの知識階級の女性たちが政治への女性参加を訴え階級の差別に異議を唱えていたことは、当時のGlasgowの意識と呼応し、彼女はそれに深く共感したのであった。

イギリスから帰国後、Glasgowと姉のCaryはリッチモンド中央通西一番地にある自宅に友人たちをお茶に招き、ヴァージニア議会に女性参政権を認めさせる署名運動を始めることを合意し、ヴァージニア女性参政権連盟(Equal Suffrage League of Virginia)を結成する。この中に幼少の頃から友人であった改革運動家Lila Meade Valentine や同じくリッチモンドの女性作家Mary Johnstonが含まれていた。第二回の会合で全国女性参政権協会(National American Woman Suffrage Association, NAWSA)に連動することを合意し、Glasgowは積極的に活動に参加しようと決意した。ただこの段階でGlasgow自らは作家として参政権運動に参加する立場をはっきりと示し、Valentineをヴァージニア女性参政権連盟の会長に推し就任させた (Peaslee 59)。

その後Glasgowはフェミニズム作家として作品を発表しながら、実際にニューヨークで一度、リッチモンドで一度デモ行進にも参加している(Ekman 32)。次の項では、Ekmanが指摘するようにGlasgowのフェミニストとしての意識が一番熱いものであった1909年の作品*The Romance of a Plain Man* の中で女性参政権運動が如何に描かれているかについて考察する。

IV

Glasgowが女性参政権運動に一番熱心であった1909年に発表されたのが*The Romance of a Plain Man*である。この作品はその題名どおり、「ある平凡な男のロマンス」を「私」Benjamin

Starr (以下Ben) が語るものである。貧しい下層階級の少年が、アメリカ資本主義繁栄の機に乗じ投資家として事業に成功し金銭的な上流階級にのし上がっていく、アメリカン・ドリームの成功物語である。作品の中でGlasgowが前面に出しているテーマは「階級差のある結婚の困難性」であり参政権運動を真正面から取り扱ってはいない。しかし主人公の妻となる上流階級のサザン・ベル、Sally Mickleboroughには女性参政権運動に傾倒している伯母がおり、伯母の気性をそっくり受け継いだ知的で芯の強い女性としてSallyを描出している。²

Benはリッチモントの貧しい石工の家庭に生まれる。Benがまだ9歳の時ひどい嵐の夜、彼の貧しい家に突然上流家庭の母と娘が何者かに追われながら雨宿りに逃げ込んでくる。以来Benはその真っ白いコートを着て赤い靴を履いた自分と同じ位の歳の可愛い少女に恋心を抱く。その時その少女に、“I don't like it here, mamma, it is a common place,” “I don't want him to take my cap. He is a common boy.”(9)と言われ、Benは初めて自分の身分を恥ずかしいと思うようになる。母娘が去ったあと、先ほどの“common”の意味がはっきり分からずBenは母にその意味を尋ねる。母親は“It means generally that anybody is a fool” (16)と答える。「この品のない場所、下品な男の子」と初めて言われ、社会に「階級」が存在することをぼんやりと認識する。

嵐の中、その少女は暴力を振るう父親から逃げ出したということを噂に聞き、その少女にもう一度会いたくて逃げた先の屋敷を探し出す。その途中教会の墓地で一人の老人に偶然会い友達になる。この老人こそがBenが生涯を通じて目標とし、息子のように目をかけてくれるようになるGeneral Bolingbrokeであり、the Great South Midland and Atlantic Railroadの会長であった。Benは教会の庭を抜け、雨の中逃げていった母娘の滞在する屋敷を突き止める。そこは貧しいBenにとってはまるで別世界のように高い塀に囲まれた大きな白い屋敷であった。門から中を覗いていた時にその少女が声をかけてくる。Benは少女を「魅惑の庭の王女さま」(the princess of the enchanted garden)(33)だと思う。少女と母親は父親の暴力から逃げ出し、祖母と二人の独身の伯母たちが暮らす母親の実家である屋敷で暮らすようになる。男性の「暴力」から逃れ、女性だけが住む高い塀のある美しい屋敷が花咲き乱れる「魅惑の庭園」として描写されている。Benは庭に入って一緒に遊んでもいいかとたずねる。すると少女はBenを見下し、“You can't (play with me) because you're common” (34)と答える。またしても“common”と言われ、Benは“common”という身分から抜け出したいと強く思う。そしてその階級の劣等意識と初恋の少女Sally Mickleboroughに対する憧れが彼の成長の動機となる。

しばらくしてBenは母親が突然亡くなり、2歳の妹と歳の離れた兄とともに残されるが、間もなく父が「これが新しい母さんだ」と下品な女性を連れてくる。Benはそのだらしない女性をととも母親として認めることが出来ず、9歳にしてSallyにもらった犬のSamuelを連れて家を飛び出す。

家を飛び出した彼は、まず街中の野菜市場で走り使いをしたことから、貧しい子沢山の八百屋John Chitlingの家で世話になることになる。狭い汚い家ではあったが屋根裏部屋のベッドを与えられ、Chitling婦人に子どもが一人ぐらい増えても平気だと言ってもらい、他の11人の子どもたちと一緒に暮らし始める。二日後父親に見つかり連れ戻されそうになるが、Benはそこで野菜の配達をして働くことになる。“My kitchen is my kingdom” (63)と言うChitling婦人にGlasgowはリッチモントの普通の女性が当時女性参政権に関してどのように考えていたかを下層階級の女性が使う英語で次のように語らせている。

“...I like a man that knows a woman’s place, an’I like a woman that knows it, too. Yo’ma was a decent, sober, hard-workin’ person, wa’n’t she, Benjy?”

I replied that she was always in her kitchen and generally at her washtub, except when she went to funerals.

....“but what I say is that the woman who wants pleasure outside her do’ain’t the woman that she ought to be, that’s all. What can she have, I ax, any mo’tan she’s got? Ain’t she got everything already that the men don’t want? Ain’t sweetness an’virture, an’patience an’long-suffering an’childbearin’ enough for her without her impudently standin’ up in the face of men an’axin’ for mo? Had she rather have a vote than the respect of men, an’ain’t the respect of men enough to fill any honest woman’s life?” (64)

Benの亡くなった母親のように、女性は家の中で炊事洗濯をうまくやれば良く、女性の居場所は家のなかにある。家の外に楽しみをを求めるべきではない。女性には優しさ、美德、忍耐強さ、長い出産の苦しみ、子育ての苦労だけで十分ではないか？これ以上男性たちに何を求めると言うのか？夫のことを尊敬しているならば夫が投票すればいいのであって、貞淑な妻は夫が投票した結果に従えばよいと言っている。Glasgowはこのような考え方を母性豊かで暖かな人柄のChitling 婦人に語らせている。篠田靖子氏の論文「アメリカ婦人参政権運動の反対勢力」によれば、これは当時の多くの人々にとって当然の考え方であったことが述べられている。婦人に参政権が必要でないと考えた人々の多くは、このように投票権とは一家に一票あたえられたものであり、ひとつの家庭の代表として夫が投票をすれば良く、妻は夫と同じ考えを持つべきであるため夫に従えばよいと考えられていたのである。³

それから4年、野菜市場でChitlingさんの手伝いをしていた13歳のBenは、教会の庭でよく出会う老人Generalにどうしたら自分が“common boy”から抜け出せるかを相談する。Generalの紹介でBenはGeneralが株の90%を所有しているthe Old Dominion Tobacco Worksで300から400人の黒人たちがタバコの葉を茎からひたすら取り除いている大きな倉庫で使い走りとして雇ってもらう。階級に劣等意識を持っているBenが自分より身分の低い黒人たちの現実を知ることになる。リッチモンドを離れウエスト・ヴァージニアの鉱山で働いている兄のPresidentに「お前に必要なのは教育だ」(90)と言われたことを肝に銘じ、Benは寸暇を惜しんで本を読み辞書をaの言葉から順に暗記し熱心に勉強し、その姿が上司の好感を得て、5年が経つ。

18歳になったBenはGeneralの紹介で以前からラテン語も教えてもらっていた医師Theophilusの家に下宿をしながらタバコ工場で職に付き給料を得るようになる。さらにその後Generalの指導に従い株の投機で成功し、幼い頃の夢であった鉄道会社の株主となる。そして美しく成長した初恋の女性であるSallyとGeneralの書斎で再会し、ついには周りの反対を押し切って階級差のある結婚をすることになる。

Sallyは上流階級で育ったサザン・ベルらしく美しく上品でしかも聡明な女性として描かれている。階級差のある人との価値観や生活観の違いに悩みながらも、Benの中に他の人にはない純粋さを見つけ、強い意志を持って夫を慕い続ける女性として描かれている。SallyはBenにとって理想の女性として描かれるが、Glasgowは彼女を婦人参政権運動には参加させない。あくまでも家で美しく優雅に暮らしながら夫を待つ女性として描いている。しかし、受身的に結婚を続

けるのではなく、伝統に逆らって「階級差のある結婚」を主体的に選択していく女性として描かれている。

作品中Sallyの伯母が二人登場する。一人が伯母Mittyでもう一人が伯母Matoacaである。Glasgowはこの独身の伯母二人を、姉妹でありながら相対立する価値観を有する女性として描いている。Mittyは昔ながらの優雅な暮らしを続け、女性は家の中の天使であれば良いと考え、女性参政権運動には反対の態度を取る。女性が書物を読むとかえっていろいろな考え方に影響を受けるため、読まずに夫の考えにだけ従えばよいと次のように語っている。

“My father used to say that when a lady had read a chapter of her Bible in the morning, and consulted her cookbook, she had done as much literary work as was good for her. Too intimate an acquaintance with books, he always said, was apt to unsettle the views; and the best judgment a woman can have, I am sure, is the opinion of the gentlemen of her family.” (135)

一方MatoacaはこのようなMittyの考え方に全く反対で、自分の意見をはっきりと持たない女性は愚かであると考え。書物を良く読み、Mittyに“Fortnightly Review”の“The Emancipation of Women”を読むよう薦める(137)。Mittyよりも優しく穏やかな声で語るMatoacaは“I consider that taxation without representation is tyranny” (70)と語り、女性参政権運動に積極的に参加している様子が描写される。Sallyには“She (Matoaca) wants to have them (women) vote, , make laws, and have a voice in the government” (128)と語らせる。婦人の委員会ではスピーチをするリーダー的存在であり、また参政権運動のパンフレットを配りながら大統領選挙運動の行進に参加している。自身ほとんどのヴァージニアの女性たちと考えを異にすることを述べているが (136)、昔の恋人であったGeneralに次のように語らせている。

“She seems to think men are made just like women,” he remarked now, wonderingly; “but, O Lord, they aren’t!”

“I tell you it’s those outlandish heathen notions of hers that are driving us all crazy!” exclaimed the General, making a face as he had done over his glass of water. “Talks about taxes without representation exactly as if she were a man and had rights! What rights does a woman want, anyway I’d like to know, except the right to a husband? They all I ought to have husbands—God knows I’m not denying then that!—the state ought to see to it…” (103)

GlasgowはMatoacaに、参政権に関しては革新的であるのにSallyとBenの結婚に関してはもう一人の保守的な伯母と同じ考えを持たせている。すなわち彼らの家系のなかでこれまで身分違いの結婚は一度もない、なによりも血統を第一に考えることが我々家族の掟である、それゆえにこの結婚には反対する、とはっきり述べさせる (179)。

ある日デモ行進の中へはいった瞬間にMatoacaは倒れ、帰らぬ人となる。GlasgowはMatoacaの早い死を描くことによって、当時のリッチモンドの女性参政権運動がいかに困難であったかを表現している。

V

1909年Glasgowの自宅での決起集会で始まったリッチモンドの女性参政権運動であったが、その後まもなくGlasgowは家族に次々とおこる不幸のため中心メンバーから外れることになる（Peaslee 60）。1910年義兄Frankが突然自殺し、その後すぐとともに活動を暫った姉Caryが病に臥し1911年8月この世を去る。感受性豊かなGlasgowに多くの知的な刺激を与え、ともに書物を読み議論しあった義兄と姉の相次ぐ死はGlasgowにとって耐えられないものであったことは容易に推測できる。この後、Glasgowは心の苦しきから逃れるため、また作家として創作活動に専念しようとリッチモンドを離れ1911年から1915年をニューヨークで暮らす。この時ニューヨークでの女性参政権運動のデモ行進に参加して歩いたと言う（Peaslee 61）。リッチモンドを離れてはいたが、Glasgowは自らが会長職に推薦したValentine女史と連絡を取り合い援助を続けていた。リッチモンドでの活動はMary Johnstonと Lilia Meade Valentineに加え、Adele Clarkが加わった。Valentineの死後はMary-Cooke Branch Munfordが会長職を継ぎ、リッチモンドでも着実な活動が続けられていた（Peaslee 61）。しかし1914年と1915年のデモ行進を最後に、アメリカの第一次世界大戦への参戦を機にリッチモンドでの女性参政権運動は一旦中断することになる。第一次大戦後再び運動は最熱化し1920年の憲法修正19条へと結実することになる。

ニューヨーク滞在中にMary Johnstonからの支援の要請を受けて、Glasgowは運動に対する女性の連帯を呼びかける次のような詩を発表している。

The Call⁴

Woman called to woman at the daybreak!
When the bosom of the deep was stirred,
In the gold of dawn and in the silence,
Woman called to woman and was heard!

暁に女は女を呼んだ！
胸の奥深くかき乱された時、
黄金色の暁の中で、そして静寂の中で、
女は女を呼び、そしてその声は届いた！

Steadfast as the dawning of the polestar,
Secret as the fading of the breath;
At the gate of Birth we stood together,
Still together at the gate of Death.

夜明けの北極星のごとく確かに、
消えゆく吐息のごとくひそやかに、
我等は誕生の門で共に立ち、
死の門でまた共に立った。

Queen or slave or bond or free, we battled,
Bartered not our faith for love or gold;
Man we served but in the hour of anguish
Woman called to woman as of old.

女王であれ奴隷であれ囚われの身であれ
自由であれ、我等は闘った。
愛や黄金に信念を売り渡すことなく、
苦悩の時のうちに男に仕え、
昔ながらに女は女を呼んだ。

Hidden at the heart of earth we waited,
Watchful, patient, silent, secret, true;
All the terrors of the chains that bound us
Man has seen, but only woman knew!

大地の懐に隠れ、我等は待った。
注意深く根気良く静かにひそやかに誠実に。
我等を捕らえるすべての恐怖の鎖を
男は目にした、が女だけが知っていた！

Woman knew! Yea, still, and woman knoweth!—
Thick the shadows of our prison lay—
Yet that knowledge in our hearts we treasure
Till the dawning of the perfect day.

女は知っていた！そう、そして今も知っている！
幽閉の影が我等を重く覆うことを。
しかし心のうちにそれを知ることを尊ぶ。
完全なる日の暁まで。

Onward now as in the long, dim ages,
Onward to the light where Freedom lies;
Woman calls to woman to awaken!
Woman calls to woman to arise!

今、長くぼんやりした時代のうちに進む。
自由が横たわる光へと進む。
女が女を呼ぶ、目覚めよ！
女が女を呼ぶ、立ち上がれと！

「女王であれ、奴隷であれ、囚われの身であれ、自由の身であれ、我々は闘った」と、身分の違いを乗り越えて女性が常に連帯して闘ってきたことを強調している。今は暗い時代であるが、因習に囚われていた過去をお互いに共感できることを大事に思う、「幽閉の影」を共有しながら「自由」という光のある未来へと進まなければならない、女性が女性に声をかけ、女性が立ち上がるように励ましあわなければいけない、とエールを送っている。

VI

女性参政権運動の活発な時期に作家として世に出、認められていったGlasgowは、デビュー作の“The Woman of Tomorrow”によってはっきりとフェミニズム作家としての方向性を示した。その後実際にリッチモンドで女性参政権運動を進めるための女性連合を立ち上げ、自らデモ行進に参加しながら女性参政権運動を進めていく。Glasgowが活動を最も熱く意識していた1909年に*The Romance of a Plain Man* を出版し、その作品の中でMatoacaを運動に参加する上流階級の聡明な女性として描出している。しかしこのMatoacaをデモ行進の最中に死亡させることによって、Glasgowはリッチモンドでの女性参政権運動が容易でないこと表そうとした。参政権運動に参加する革新的な女性でさえ階級差のある結婚に反対する現実を描いた。そして強い意志を持つサザン・ベルSallyに階級差のある結婚を選ばせ、聡明な女性が階級を超えた結婚を可能にし古い伝統を変えることができる様子を描出した。Glasgow はフェミニズム作家として見事にリッチモンドの女性たちにひとつのメッセージを送ったのである。

The Romance of a Plain Man の4年後に出版された*Virginia (1913)* に登場する女性たちに政治的な活動に関わるものはいない。最愛の家族の自殺や病死という不幸な時期を経て、Glasgowの描写する女性たちに変化が現れだす。社会的環境にたくましく挑戦する強い女性たちよりも、むしろ環境に弱い人間の内面を日常の営みの中に描き出そうとする。Glasgowはその後も南部ヴァージニアの伝統の中で因習に制約を受けていた女性たち、そして男性たちを、自分の作品の中に克明に記録しようとしたのである。

註

¹Ellen Glasgow, *A Certain Measure*, 3. 6作品は年代順にI. *The Battle-Ground* (1850-1865), II. *The Deliverance*(1878-1890), III. *The Voice of the People* (1870-1898), IV.

The Romance of a Plain Man(1875-1910), V. *Virginia* (1884-1912), VI. *Life and Gabriella* (1894-1912) であることが述べられている。

²Ellen Glasgow, *The Romance of a Plain Man* (1909; New York: Charles Scribner's Sons, 1938) この作品からの引用はこの版に基づき、以後、引用箇所は括弧内に頁数を示す。

³篠田靖子、「アメリカ婦人参政権運動の反対勢力」111-113。篠田氏は女性参政権運動の反対勢力の思想的な背景として大きく三つあることを述べている。すなわち①女性の男性への従属は聖書に立脚しており、女性が家庭にとどまるのは創造主の意思である。②女性は肉体的に外での活動に適さない。③投票権はひとつの家庭に一票あるのであって、社会学的見地から夫婦が別の投票をすることは家庭という単位の崩壊につながる。

⁴Julius Rowan Raper, *Ellen Glasgow's Reasonable Doubts*, 18-19. Raperの注釈にはこの詩が1912年から1913年にかけて *Current Literature*, LIII (November, 1912), *Collier's Magazine*, XLIX (July 27, 1912), *Current Opinion*, LIV (January, 1913) の複数の雑誌に掲載されたことが記されている。尚、拙訳を試み、付け加えた。

引用文献

- Ekman, Barbro. *The End of a Legend: Ellen Glasgow's History of Southern Women*. Stockholm: Uppsala, 1979.
- Glasgow, Ellen. *A Certain Measure*. 1938. New York: Harcourt, Brace and Company, 1943.
- . *The Romance of a Plain Man*. 1909. New York: Charles Scribner's Sons, 1938.
- . *The Woman Within*. New York: Harcourt, Brace and Company, 1954.
- Peaslee, Catherine G. "Novelist Ellen Glasgow's Feminist Rebellion in Virginia—the Suffragist," *Regarding Ellen Glasgow: Essays for Contemporary Readers*. Richmond: Library of Virginia, 2001. 55-62.
- Raper, Julius Rowan. *Ellen Glasgow's Reasonable Doubts: A Collection of Her Writings*. Louisiana: Louisiana State University Press, 1988.
- 篠田靖子。「アメリカ婦人参政権運動の反対勢力」『金城学院大学論集—人文学科編』第13号 1980年, 109-130頁。